

ティーチング・ポートフォリオ

大学名 人間総合科学大学
所 属 保健医療学学科部看護
名 前 上松 恵子
作成日 2025 年 4 月 25 日

1. 1. 責務（何を行っているか、何を果たしているか）

私上松恵子は 2025 年に保健医療学部看護学科の教員として着任した。今年度の担当と授業科目は以下のとおりである。各授業のシラバスは人間総合科学大学 WEB ポータル上で本学学生並びに教職員に公開されている。

科目名	対象学部 学年	必修 選択	開講年度、 前期・後期・通年	単位
小児看護学概論	看護学部 1 年	必修	令和 7 年 後期	1
小児看護援助論Ⅰ	看護学部 2 年	必修	令和 7 年 前期	2
小児看護援助論Ⅱ	看護学部 2 年	必修	令和 7 年 後期	1
小児看護学実習	看護学部 3 年	必修	令和 7 年 通年	2
大学生入門	看護学部 1 年	必修	令和 7 年 通年	1
看護研究Ⅱ	看護学部 4 年	必修	令和 7 年 前期	1

担当する授業は 1 年生～4 年生まで他学年にわたる。主となる担当は小児看護学領域である。

子どもは、家族の中に誕生し、家族に育まれ成長発達していく存在である。小児看護に携わる看護者は、子どもを主体的な存在としてとらえるとともに、子どもと家族を一つの単位としてとらえ、子どもと家族が自らの力で健康を維持し、幸福に生活していくことができるように、看護の専門性を発揮して支援していく必要がある。

小児看護の理念、歴史と意義、子どもの権利について学び、こどもの権利を養護する小児看護のあり方について考察し、修得できるようになる。さらに、子どもの健康問題や子どもを取り巻く社会・医療の現状と課題、子どもの法律・施策について学ぶ。小児看護で用いられる理論やこどもの成長発達について学び、子どもやその家族を理解することにより、子どもと家族の発達課題、成長発達を支援する看護実践ができるように全学年を通して学修を深めていく。

2. 理念（教育に対する考え方）

「右手にライセンス、左手に生きる力」にとっても感銘を受ける。

看護師のライセンスを手にしても、十分に活用し自分自身の人生を豊かなものにする生きる力が必要である。そのためには、ライセンスだけではなく、思春期の発達課題でもある

「生きる力」を育てることも重要であると考え。

看護の対象は人間である。人間の心理・身体・環境・社会的側面から多面的・総合的に理解し、専門科目である看護・環境・健康について十分な知識を身につけることを基盤に食・栄養・医療を総括した人間性豊かな看護師の育成に尽力していきたい。

3. 方法（教育方法において大切にしていること）

1) 教材観について

小児看護学は1年次・2年次の小児看護学概論、小児看護援助論Ⅰ、小児看護援助論Ⅱで学んだ小児看護の対象者・看護の機能する場・看護活動の理解を学ぶ。小児看護学実習ではこの既習の学習をもとに、臨地の場面で看護の対象者を実際に受け持ち、看護過程を用いて個別的援助を実践する。この一連の過程を通し小児看護学の理解を深めることを目的としている。

目的の中にある看護過程とは、小児看護の目的を達成するための方法（道具）であり、問題解決思考を育てるための重要な方法である。また看護過程は、今までの学習の成果を活用し、統合する学習である。看護過程は、アセスメント、看護診断、看護計画、実施、評価のプロセスからなる。これらのプロセスを通して行われ、看護は対象者にあった援助となる。

そのため、受持ち患児に合わせて、今までの知識を引き出して組合せ、多面的に対象を理解していく必要がある。しかしながら、知識の少ない学生や統合する力の弱い学生にとっては、看護過程の思考を通した学習が進みにくい。

学生は、2年後期の小児看護援助論Ⅱ（看護過程）の科目では、小児特有の疾患事例を通して看護過程を展開する。学生は、これまでの学習の成果を活用し、統合する学習が必要となるため、学習の不得意分野が浮き彫りとなるため、苦手意識をもっていると推測している。

また、学内では、紙面上に整理され提供された情報で看護過程を展開してきたが、実習では生身の患児の情報であることから、日々情報を収集したり、さまざまな情報のなかから必要な情報を判別したりと、かなり戸惑うことが予想される。

臨地実習中はさまざまな場面をとらえて、タイムリーに「なぜそう考えたのか？」を発問し、学生自身が思考の整理をできるようにかかわることが重要である。

2) 学生観について

小児看護学概論では、子どもの健やかな成長・発達、子どもの特徴について学び、小児看護援助論Ⅰでは、健康障害を伴った子どもと家族への看護について学修している。小児看護援助論Ⅱでは、小児特有の疾患事例をもとに、看護過程の展開と援助技術の演習を行っている。

しかし、臨地実習において学生は初めて患児に必要な援助を看護過程の思考を通して抽出し実施するため、学生の学習内容と技術の習熟度、患者への適応力を確認しながら、安全への配慮、危険の予測、対応について補完する必要がある。

一方、最近の学生は、気の合う仲間同士では話はできるが、自己を傷つけないよう、失敗を恐れ、人間関係が苦手な傾向があるといわれている。学習面でも失敗を恐れてなかなか自分から質問にこなかったり、自分で文献検索をしたり、考えたりすること等も苦手である。

また、疑問が生じた場合、さまざまな考え方があることを検討して考えることをせず、安易に白黒はっきりとした正解を求める傾向がある。学生が失敗を恐れて、意見や質問をすることができないことがないように、個別に指導する場面を設けること、また、学生の意見を最初から否定する言動は避けたいと考えている。そして、刈谷¹⁾がいう複眼的思考つまり、ありきたりの常識や紋切り型の考えにとらわれずにものごとを考えていく方法を身につけられるように指導していきたい。

3) 指導観について

対象の健康問題を解決するために、どのような問題解決法があるのかを、看護過程という道具を用いて展開できるように関わりたい。そのため看護過程においては、どこでつまづいているのか、どの部分が不得手なのか、学生の状況を随時確認し指導していきたい。

また、学内では、原理原則が主で、対象にあった個別の看護まで考えることは難しい。しかしながら、実際の看護の場では、一人一人にあった看護を提供していかなくてはならないため、受持ち患児の情報を活かしながら、対象にあった看護を考えさせたい。

学内での看護過程では、紙面上に整理された情報を使用して事例を展開している。しかし臨地実習では、受持ち患児および家族から必要な情報を収集することが必要となるため、コミュニケーションが苦手な学生には、受持ち患者との仲介役となり、スムーズな導入を図る必要がある。また膨大な情報量や日々変化する対象に戸惑い、情報に気づくことも難しいことが予測されるために、意図的な情報収集ができるためにもモデルを示しながら指導したい。

看護援助の際、安全、安楽の意識はあるものの、技術の未熟さや自己のことで精一杯となるため、安全への予測や対応もできにくい。そのため、安全、安楽についてその都度確認していく必要がある。

臨地実習では、臨床でしか学ぶことができないものを学生が感じ、「実習は楽しい」「できた」という満足感を学生自身が感じられるように関わっていききたい。本実習では学生とはマンツーマンで関わるが多い、そのことが学生にとって負担になることがないように、学生の準備状況を観察しながら、関わっていききたい。

最後に、教員自身が看護師として学生の「モデル」であることを意識して、実習に関わるすべての人々に感謝して実習に臨みたい。

4. 成果（学生さんからの評価に対して、学生さんの学修成果について）

全授業でアンケートの提出を学生に求めている。以下にアンケート結果の一例を示す。

授業科目 小児看護学援助論

実施日 2025 年度 前期

実施対象者数 71 人

学部学科 保健医療学部看護学科

事由記述（一部抜粋）

- ・講義内での動画視聴の時間があり分かりやすかったです。
- ・動画も一緒に見れて理解が深まりました。
- ・看護師に求められることはそんな親や患者に対してどのように向き合わせるか、どのような声掛けをすることが大切か考えることができた。今後の学習はより深く、小児について学んで行きたいです。
- ・段階に合わせた声かけやそばに居る必要があると思うので段階に合わせて、その親に合わせて声かけしていく努力をしていきたいと思った。
- ・そういった人達に寄り添えるようにこれから知識を蓄え、知識を元にした看護をしていきたいと考えた。
- ・母親の不安に寄り添い、安心できる環境を整える看護の役割の大切さを学ぶことができました。
- ・私は小児と母性で今将来を迷っています。これからの授業も楽しみです！
- ・今回の講義を通し自分がまだまだ先天異常について理解出来ていないと気づくことが出来たため復習や今後の講義を通して学びを深めて行きたいと思います。

学生はとても前向きに学習しており、自分なりに考えていることが分かった。

一方では、

- ・スライドの字が小さく少し見づらいと感じました。
- ・単語を書くところが狭いため文字が書きづらい。

などの意見もありました。

質問では、

- ・ダウン症の人は平均寿命が短いと聞きますが、その中でも長く生きている人は生活環境などに違いがあるのでしょうか？
- ・知的障がいだけを持っている方は親の遺伝のみが要因として考えられますか。（染色体の異常や受精過程ではなく）

などの記載が見られた。次の授業で学生にフィードバックを行い、学生と教員間での交流を図る。

5. 目標（教育活動の中短期目標と達成時期）

看護は実践の科学といわれており、臨地実習は欠かせないものである。学生は1・2年次の机上の学習を基に、3年次の臨床現場で知識と実践の統合を行う。また、初めて患者とその家族と関わりをもち、戸惑いも大きいと推測できる。臨床現場での体験を既習の学習を想起させ結びつけることができるよう、学生の思いに寄り添い指導をしていく。

1・2年次の学習は学内であるが、臨地をイメージできるように臨地実習のエピソードをふまえて授業を行う。

4年次は看護師国家試験合格に向けて、小児看護学の補習講義を行う。さらに、小グループでの学習指導をっていく。